慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済史研究の方向 : 理論と歴史
Sub Title	History and theory : trends in economic history
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1981
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.74, No.6 (1981. 12) ,p.561(1)- 584(24)
JaLC DOI	10.14991/001.19811201-0001
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19811201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学界展望：

経済史研究の方向：理論と歴史*

岡田　泰男

はしがき

経済史は経済学の一部門であるか，歴史学の一分野であるか。しばしば抱かれるこの疑問に対して，誰をも満足せしめるような解答を与えることは困難であろう。経済史は経済学と歴史学の双方を親として誕生した，ポスタンの言をかりれば mule の如き存在に他ならないからである。したがって，それは経済学者と歴史家とが共に権利を主張しうる牧草地に喩えられ，あるいは，歴史学と経済学という二つの大陸をつなぐ地峡に比せられる。しかし，様式においても内容においても大きな相違をもつ二つの学問の間に身をたゆとわせることは，必ずしも快適ではない。それ故，個々の経済史研究者は自らを，経済学あるいは歴史学のいずれかにより近い存在として位置づける。そして，学界全体としてみると，時代により，国により，経済史が経済学の方に引きよせられていたり，歴史学の方に傾むいていたりするという変遷が認められる。(1)

20年程以前を振り返ると，当時の経済史学界は，わが国においても外国にあっても，歴史学の方向に近づいていた。しかし，1960年代以降，とくにアメリカを中心として，振子を逆の方向へゆり動かそうとする傾向がひろまり，その波はようやく今日わが国にも及ぼうとしている。新しい経済史，数量経済史，計量経済史など呼称はさまざまであるが，いずれも経済史を経済学の方向へ近づけよう，あるいは引き戻そうとする姿勢を示している。

本稿は，筆者の専攻するアメリカ経済史を中心に，かかる傾向について考えてみようとするものである。なお，最初に筆者のバイアスを告白しておくべきであろう。わたくし自身の立場は，経済史をむしろ歴史学に近い分野と考えるものである。したがって本稿は，最近の傾向に対しては批判

* 本稿の骨子は，かつて慶応義塾経済学会報告会において「経済史家の片想い」として発表したものである。その際，神谷伝造，高橋潤二郎，蓑谷千凰彦，高梨和紘，丸山徹，中村勝己，大熊一郎，斎藤修の諸先生方からコメントをいただいたことを感謝する。J. N. ケインズ対アシュリー，マーシャル対カニンガムというような見解の相違が，時と場所とスケールを変えて存続することを知った。なお，具体例としてとりあげた諸研究は，いずれも学部研究会（ゼミナール）で，学生諸君と共に読んだものである。さまざまな反応を示してくれた彼等にもお礼を言いたい。

注(1) 小松〔76〕に収められた諸論文を参照せよ。

的な目を持って書かれていることを記しておきたい。[2]

I　経済史と経済学

経済学入門書によれば，経済史は理論・政策とならぶ経済学の一部門とされている。これを単に教育上の配慮と考えることは正しくない。スミスやマルクスにまでさかのぼらずとも，経済学者中の経済学者マーシャルの著作に接する者は，彼の経済学にあって経済史が正に一部分をなしていたことを知るであろう。とくに，その *Industry and Trade* の前半の如きは，比較経済史の古典と呼ぶにふさわしい内容を有している。シュンペーターやケインズにあっても事情は同じである。ケインズの時代把握と人物描写は，彼が歴史家の眼を持っていたことを証明するものであろうし，シュンペーターの編み出した「企業者」「革新」の概念は，経済史研究にとって欠かせぬものとなっている。[3]

過去の巨人の名をあげるのみでは，かえって誤解を招くかもしれない。もう少し現代に近づこう。たとえば，アーサー・ルイスやキンドルバーガー，あるいは故人ではあるがヌルクセなどの場合を考えてみよう。前二者にあってはその興味の中心が経済発展におかれていることから，理論的著作にも歴史的考察がもり込まれているが，それのみならず経済史プロパーというべき著作もある。とくに又，ルイス・モデルとして知られる無制限労働供給の理論は，近代経済史の研究にあたり必須の分析用具となっている。ヌルクセの最後の作品となったウィクセル講義は，正に理論・歴史・政策が渾然一体となった白鳥の歌であるが，「貿易が成長のエンジンとなった」という表現などは，経済史家のヴォキャブラリイにも定着している。さらに，クズネッツやフリードマンの名を上げてもよい。クズネッツの下からは今日のアメリカ経済史学界の指導者が輩出したが，フリードマンにも貨幣史の大著[4]がある。

以上の如き経済学者の業績を考えてみると，経済史が経済学の一構成要素たることは，当り前の話のように感じられる。ドイツ歴史学派は学説史上の存在であるが，それとは別の意味で，Historical Economics あるいは，Historical Economists という存在も可能なように思われる。しかし，経済学専門誌もしくは経済史専門誌に目を通す者は，上記の如き感想が illusion に過ぎぬことを思い知らされるであろう。神々の遊ぶオリンポスにあっては，はたまた時空をこえたナルニア国にあっては，夢と現実とが一致するかもしれない。しかし生身の経済学徒の今日の営みが示さ

注（2）新しい経済史については，すでにかなりの紹介がある。安場〔84〕，田口〔82〕などを見よ。わが国への導入例として，新保・速水・西川〔81〕を見よ。

（3）Marshall〔47〕，Schumpeter〔67〕，Keynes〔35〕。なお Andreano〔1〕を参照せよ。マーシャルは「原理」を書く前にすでに経済史について書こうと考えていた。〔48〕p. 507.

（4）Lewis〔43〕，Kindleberger〔37〕，Nurkse〔55〕，Kuznets〔38〕，Friedman and Schwartz〔23〕.

れる専門誌の世界にあっては，Economic History と Economics とが異なることは明らかであろう。また，経済史の専門誌たとえば *Economic History Review* を購読しようという経済学者などは rare bird といってよかろう。

ヒックスは，オリンポスの神々のひとりであると共に，そのような珍鳥でもある。彼の経済史に対する親近感は，さまざまな機会に示されているが，『経済史の理論』を読む者は，ヒックスが Historical Economics の存立など望んでいないことを知るに違いない。彼は，経済史を経済学という建物の一部屋に押し込めようとする試みには反対である。彼は経済史を広くとらえ，それが経済学者，政治学者，法律家，社会学研究者，歴史家などが一緒に話しあえる forum たることを望んでいる。この見方は，わたくしにとっては極めて魅力的であって，共鳴したくなる。しかし，この forum において，経済史家はいかなる役割を果すのだろうか，という不安も生ずることは否定できない。(5)

経済史には，それ独自の方法があり内容がある。独立した学問体系としての経済史にとって他は補助学にすぎない。大家であれば，このような意見を堂々と述べることができるかもしれない。しかし多くの経済史研究者は，イソップの寓話を思い出してしまうことだろう。他のさまざまの鳥の羽根で身を飾り立てた例のからすの話を …… かくして経済史の専攻を志した者は，経済学者ともいえず，さりとて純粋の歴史家でもないという不安定な状況の中におかれることになる。経済史家は，キャリアのいずれかの時点で，identity crisis に苦しむ，といいかえてもよい。

わが国において，経済史研究者の多くは自らを歴史家の側に位置づけてきた。あるいは経済史を歴史学の一分野と規定してきた。このことは，例えば長い間，西洋経済史の標準的テキストであった高村象平や増田四郎の著書を見れば明らかであろう。あるいは経済史学界における支配的潮流であった大塚史学を考えてもよい。それが「大塚史学」であって「大塚経済学」でないことは象徴的である。名は体をあらわす，といえる。かかる事態は第二次大戦後の，わが国歴史学界において，経済史もしくは社会経済史研究が中心的地位をしめ得たことと無関係ではない。文学史や美術史すら，経済史的背景を重視した。とくに，マルクス的立場からの解釈にあっては，歴史は経済史的側面を重視せざるを得なかった。マルクス主義の隆盛は，立場・信条の如何を問わず，すべての経済史家に利益を与えたといってよい。歴史学界において，経済史専門家たることは，決して不利ではなかった。歴史学は，経済史家にとって住み心地の良い世界だったと思われる。(6)

もちろん，わが国の経済史研究者の多くは，職業的分類からいえば，大学の歴史学科ではなく経済学部に所属していた。さらに，経済史は多くの大学において，経済学部の科目であり，必修科目でもあった。かかる制度的不整合は，場合によっては問題を生ぜしめた。古代・中世経済史の研究

注(5) Hicks [31].
(6) 高村 [83], 増田 [77], 大塚 [79].

者が，サミュエルソンの原書講読を担当したり，国民所得の決定について授業したりせざるを得ないこともあったからである。しかし，研究と教育との乖離は，程度の差こそあれ，すべての教員が経験することであって，乗り越えられぬ障害ではない。また，経済学の入門講義といっても，マルクス的な内容であれば，資本主義発達史のようなものにかなりの時間をさいても，あまり不都合ではなかった。かくして，経済史家が経済学部に身をおきつつ，歴史家的姿勢を保つことは，さして不自然でなかった。

アメリカにあっては事情が異なった。一見悩みのなさそうなアメリカ人研究者にも，先に述べたidentity の悩みがあった。とくに，経済学部に所属して経済史を専攻する場合，その悩みは深かったように思われる。たしかに，経済史は一応は丁重な扱いを受けていた。ハーヴァードの大学院では，経済理論を専攻する学生も，経済史の講義を聞かねばならなかった。10巻からなるアメリカ経済史も刊行されていた。多くの大学で採用されたフォークナーやヒートンの経済史テキストは，はなはだ歴史学的であった。(7) しかし，アメリカでは歴史学の主流は経済史ではなかったし，他方，経済学は歴史から遠ざかり，もしくは歴史を追放しつつあった。統計好きなアメリカ人向きの，こんな数字もある。*American Economic Review, Quarterly Journal of Economics, Journal of Political Economy* の3誌は，アメリカの経済学界を代表する雑誌であるが，それらにおいて，経済史関係論文は，1925～44年には 6.5%をしめていたのに，1945～74年には 3.3%に下ったというものである。(8) かくして，アメリカの経済史研究者は，両親に離婚された（もしくは，結婚していない両親から生まれた）子供のような境遇におかれた。経済学部に籍をおく場合には，厳格で冷たい父親に引きとられたようなものといえるかもしれない。

こうした中で，1960年代以降，自らを経済学者たらしめようとする経済史研究者が現われるにいたった。フォーゲルやノースといった人びとは，その代表者である。これは，当時，経済成長への関心が高まり，それに関する実証研究への要求があったこと，また1960年にロストウの『経済成長の諸段階』が刊行され，アカデミックな評判はともかく，ジャーナリスティックには大反響を呼んだことと無関係ではない。経済成長についての計量的分析や，一見壮大なロストウ理論に対する有効な反撃には，例えば19世紀の国民所得や投資率の推計が必要であった。かかる必要に応じ，計量経済学の衣裳をまとって現われた研究の中に，新しい経済史研究のひとつの芽生えがあった。そして，フォーゲルたちは，Econometric History とか，Cliometrics というような新語をこの世に送り出した。しかし，計量という点にあまり重きをおくことは，事の本質を見誤らさせる。当時生じた新しい方向とは，結局，経済史を歴史学ではなく経済学の一部門として位置付けようとした動きだったからである。経済学が久しぶりに長期的視野を取り戻し，実証を重視するようになったチ

注(7) David et al. [8], Faulkuer [15], Heaton [30].
(8) これは McCloskey [45] による

ャンスに，経済学の中における経済史の地位を回復しようとした動きといってもよい。(9)

メイナードの父，ジョン・ネヴィル・ケインズは，経済を対象とする歴史家には経済理論が必要であるといった。しかし，わが野村兼太郎の恩師であり，ハーヴァードで最初に経済史を講じたアシュリイは，plain common senseがあれば十分と反論した。1893年のことである。plain common sense を重視する伝統は，1960年代まで続いていた。60年代に「新しい経済史」を標榜した人びとは，J. N. ケインズの側に立ち，彼等の身につけた経済理論を利用せんとした。ヴェトナムの暗雲がひろがり始めていたとはいえ，アメリカ経済は繁栄を謳歌し，経済学者は名声を享受していた。ランス・ディヴィスの言によれば，サミュエルスンの『経済学』はバイブルの次に売れていたという。かかる時代のアメリカにおいて，経済史研究者が，歴史学よりは経済学に身をよせようとしたのも無理からぬところであったかもしれない。(10)

経済理論と計量的方法という鎧をつけ，クリオメトリックスなどという審美的たらざる名をかかげた経済史研究者の出現は，多分彼等が予想していた以上の反響と反感を呼びおこした。当時，わたくしは偶々アメリカ留学中であったので，その fury を，今となっては懐かしく思い出す。彼等の出現が刺激的であったのは，彼等が極めて論争的題材をとりげ，偶像破壊的結論を示す勇気と大胆さを持っていたからであった。例えば，今では記念碑的業績とされているコンラッドとマイヤーの論文は，奴隷制が経済的にみれば有利であったことを証明した。フォーゲルは，アメリカの経済成長にとって，鉄道の果した役割がごく小さかったことを示した。ノースは，初期のアメリカ経済の成長をささえたのは，南部の綿花であると述べた。他の論者は，アメリカ独立が経済的には不利であったといい，土地投機業者が西部の発展に貢献したといい，農民運動の主張は経済的根拠を欠いているといった。これらの新見解は，いずれも通説に反するものであったが，方程式や統計に飾られているため，それらを見慣れていない旧来の経済史家にとっては，正に dazzling であった。しかも，理論と計量による分析は，例の plain common sense によるものより，はるかに切れ味が良かった。(11)

意気軒昂という言葉は，当時のフォーゲルたちのために作られたものであったと思われる。老大家の間での評判は香ばしくなかったが，新しい経済史は若い研究者の心をとらえた。それは，もちろん経済学者のマーケットの状態とも関連していた。現在と異なり，当時アメリカの大学で職を得ることは，そう困難ではなかった。しかし，経済学部の場合には，一般教養レヴェルの経済学と，経済史との両方を教えられるような assistant professor への需要が多かった。フォーゲル流の

注(9) Rostow〔63〕. なお North〔50〕, Fogel〔16〕は初期の代表作であるが，1964年のアメリカ経済学会シカゴ大会の記録（*American Economic Review*, May, 1965）を見よ。

(10) Keynes〔36〕, Ashley〔2〕. なお同じ頃に Marshall〔48〕と Cunningham〔7〕の間でも論争があった。Davis の発言は筆者が直接聞いたもの。

(11) 当時の雰囲気を知るためには，Davis〔9〕, Redlich〔61〕などを読むべきであろう。代表的な論文は Fogel and Engerman〔19〕や Purdue Faculty Papers〔60〕に集められている。

行き方は，かかる需要に最適であったから，学問的にも世俗的にも，それは若い研究者の人気を集めたのである。かくして多くの New economic historian が輩出した。当時の経済史のドクター論文のコレクションを見れば，その傾向がはっきり解るであろう。(12)

フォーゲルが「経済史と経済理論の再統合 (Reunification)」という論文を *American Economic Review* に発表したのは，1965年5月のことであった。翌年にはノースによる新しい経済史の教科書が刊行された。経済史専門の雑誌 *Journal of Economic History* のページをパラパラとめくっただけでは，*AER* との区別がつかないというような事態が生じた。かつて経済史の論文を書くものは，文章に工夫をこらしたが，今や方程式と統計の加工に頭をつかうだけとなり，歴史学に近い経済史家は社会史という分野に活路を見出そうとした。これを，コンピューター・アレルギーの旧世代が社会史に逃げ込んだ，と見るのは，うがった見方といえないこともない。しかし，当時すでに統計を多用したサーンストロームの業績は注目を集めていたし，その後のアメリカにおける社会史研究は計量化の方向に向かった。旧世代の経済史家が *JEH* の購読を取りやめた（実際に購読者数は減少した）のは，それが経済学の雑誌のようになってしまったからであり，社会史へ向ったのは，そこに歴史学的雰囲気が存在したためであった。(13)

もちろん，新しい経済史の成功は，あのすべての価値感が変革されたような60年代のアメリカという背景ぬきには語れまい。しかし，それはともかく，経済史は経済学の一部門となり，1970年代に入れば「新しい」という形容詞は不必要となった。フォーゲルはシカゴ大学からハーヴァードへ招かれ，アメリカ学士院の会員となった。かつての enfant terrible は功なり名遂げた存在となり，アメリカ経済史学界は変貌した。すべてが，メデタシメデタシとなって良い筈であった。ところが，意外な陥穽が待っていた。Clio は親切だったが，Clotho たちは意地が悪かったとでもいおうか。次の引用文を見てほしい。(14)

> 〔New economic historians〕 reshaped economic history into a form suited to the taste of their colleagues in economics, yet their colleagues did not buy.
>
> (McClosky, 1976)

> While it was an internal success, cliometrics failed to impress outsiders, particularly economists. (Rutten, 1980)

なぜ，このような結果が生じたか。その理由を明らかにするためには，経済史と経済理論との再統合が，具体的には如何なる形でおこなわれたか，を示す必要があろう。以下，いくつかの実例によって，plain common sense ではなく経済理論を使用するとは，どういうことなのかを見てみ

注(12) 〔12〕を見よ。
(13) Fogel 〔17〕, North 〔51〕, Thernstrom 〔68〕。なお Landes and Tilly 〔41〕を参照せよ。
(14) McClosky 〔45〕 p. 435, Rutten 〔64〕 p. 137.

よう。それによって，新しい経済史が，とりあえずは成功をおさめた理由と，それ以上の成功はおさめられなかった訳とが解るであろう。

II 新しい経済史の例示

まず南部奴隷制から始めよう。これは先に述べたような学説史的意義をも有している。いうまでもなく，アメリカ南部の奴隷制は南北戦争によって終末をむかえたが，すでにそれ以前から亡びる運命にあったといわれている。南部の富と繁栄は，プランテーション制度のもと，奴隷によって生産される綿花に依存していた。綿花価格は生産増大につれ低落する傾向にあったが，奴隷価格は海外からの輸入が禁止されていたこともあって上昇していた。それ故，代表的なテキストであったフォークナーの書物には次のように記されている。「ひとつのことが確実である。それは，プランテーション制度による綿花生産の一般的繁栄が，南北戦争前の期間にすでに衰退しつつあったということである。そして奴隷労働はその大きな原因のひとつであった。それは奴隷労働が不能率であるためばかりでなく，奴隷の価格が騰貴しつつあったためでもあった。」この文章は，フォークナーのテキストの第2版（1931年）にはなく，第5版（1943年）には見出しうる。そして第8版（1960年）にもあるから，二次大戦後，通説となっていた，といえよう。(15)

ところで，生産物たる綿花の価格が低落し，他方それを生産するのに必要な奴隷の価格が上昇していたから，南部プランテーション制度の没落は避けられなかったとするのは，いわば plain common sense による判断である。新しい経済史家はそれに不満だった。プランターによる奴隷購入は，経済学的に見れば企業家による投資行為とかわらない，と彼等は考える。したがって，奴隷価格が高騰したといっても，奴隷使用によってもたらされるであろう収益の流れを，市場利子率で割ってみて，利潤が生ずるような価格であれば問題はないことになる。すなわち，奴隷価格を P_s，収益を R，市場利子率を i，年度を t とした場合，

$$P_s = \sum_{t=1}^{n} \frac{R_t}{(1+i)^t}$$

上記の式を満足させるような価格で奴隷を購入（奴隷に投資）している限り，プランターの行為は合理的であったといえる。何故ならば，プランターにとって奴隷を購入して綿花を生産することが，他に投資する（例えば抵当貸付をする）ことより不利だとはいえないからである。そこで研究者にとっての問題は，上の式に実際の数字を入れてみることになる。奴隷価格や綿花価格については統計があり，収益を計算するのに必要な数値（奴隷の使用年数，衣食住や監督のための費用など）も史料から得ることができるので，その作業はさして困難ではない。その結果，新しい経済史家の到達

注(15) Faulkner [15] 8th. ed. p. 320.

した結論は，従来の通説をくつがえすものであった。もちろん，史料からどんな数字を選ぶか，収益をどう計算するかというような点で細かな議論は続いたが，大筋としての結論は同様であった。通説は崩れ，もはやフォークナーのような文章をテキストに見出すことは困難である。(16)

次に北部の産業革命をとり上げよう。南部はプランテーション制度のもと，農業地域にとどまっていたが，合衆国北部ではニュー・イングランド地方の木綿工業を先頭に，工業化が開始されていた。この過程は従来，機械の導入や工場制度の成立に焦点を合わせて説明されてきた。すなわち，スレイター工場の設立，ボストン商業資本の流入，女工の寄宿制度，アイルランド移民の到着等々である。そして，工場での大量生産の結果，家内産業は太刀打ちできなくなり，いわゆるホームスパンの時代が終了したとされる。これらの説明が間違いでないとしても，それが供給面に片寄りすぎていると新しい経済史家は考えた。この点を図1で説明しよう。

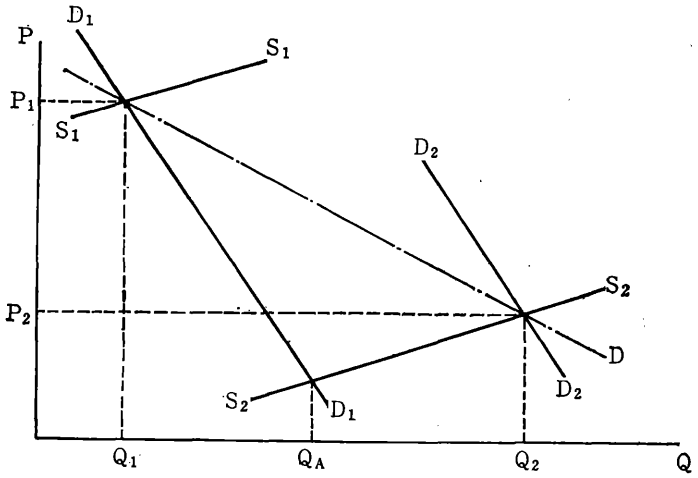

図 1

ニュー・イングランド地方における綿布の生産は1815年頃には400万ヤード程度であったが，1840年には3億ヤードを越えていた。一方，繊維製品の価格は下落し，1815年頃にはヤードあたり30セントした幅広生地が，1840年代には6.5セントになっていた。かかる事態がいかにしてもたらされたかを示すのが図1である。たて軸にはヤードあたりの綿布価格P，よこ軸には綿布生産量Qをとる。Dは綿布に対する需要曲線，Sは綿布の供給曲線を示す。(P_1, Q_1) はほぼ1815年頃の状態を，(P_2, Q_2) は1840年頃の状態を示すものとする。伝統的な解釈によれば，供給曲線は S_1から S_2 に移動したが，需要曲線はDで変化しないことになる。新しい解釈では，$S_1 \rightarrow S_2$ の変化と同時に，需要曲線も $D_1 \rightarrow D_2$ と移動したと考える。すなわち綿布生産の飛躍的増大は供給面の変化のみ

注(16) Conrad and Meyer〔6〕. 最近のまとめとして，Gunderson〔27〕を見よ。

ならず，需要面の変化によってももたらされたのであり，$Q_1 \to Q_2$ の変化のうち，$Q_1 \to Q_A$ の部分は力織機の導入・改良や工場規模の拡大に負っているが，$Q_A \to Q_2$ の部分は需要増加によるものと考える。

たしかに，19世紀前半のアメリカにおける人口増大，とくに都市人口の増大は消費者の増加を意味したし，農村地域における商業化の進展はホームスパンではなく factory（工場で製造された綿布）に対する需要を拡大させた。それと同時に，羊毛製品よりも綿製品が好まれるようになったという消費者の taste の変化も見逃がすことはできない。新しい経済史の強味は，単に需要面の重視という新観点を導入しただけではなく，計量的方法によって実際に供給曲線や需要曲線を推定し，$Q_1 \to Q_A$ の部分の比重と $Q_A \to Q_2$ の部分のそれとを数量的に示し得る点にあった。その結果，産業革命についての今日のテキストの叙述は，生産面のみならず，消費面にもふれるものが一般的になってきている。(17)

今度は時代を植民地時代にさかのぼらせよう。植民地時代については，所得分配に関する問題や，独立戦争の経済的効果に関する問題など，さまざまなトピックがある。とくに，植民地アメリカがもし本国の重商主義規制下になかったなら，という counter-factual な仮定による研究が，ある時期，話題を集めた。しかし，ここでは植民地経済の基盤であったタバコ生産をとりあげよう。そして，歴史家によるいく分不注意な表現と，経済学者による批判を対照してみよう。

植民地南部のタバコ生産は，17世紀中葉までは急成長したが，17世紀後半から18世紀初頭にかけて低迷し，18世紀の第2四半期以降，再び成長期をむかえた。かかる成長と停滞のパターンをどう説明するかは，タバコ輸出が植民地経済の死命を制し，政治や社会にも大きな影響があるだけに，以前から注目されていた。古くからの説では，新開地での掠奪農法→土地疲弊による生産減少→西部新開地への移動と成長回復，という地味枯渇説，あるいは，移民到着期→白人労働不足による生産停滞→黒人奴隷輸入による成長回復，という労働力不足説があった。しかし，その後の研究は，上記の如き植民地内部の事情よりも，ヨーロッパ市場の状況の方が重要であったことを明らかにした。タバコは正に国際的商品だったからである。もっとも，タバコ価格と生産量とが，そう直接的に結びついていたわけではない。ある歴史家は，地味枯渇説や労働力不足説に不満を表明し，市場に目を向けるように説いた後，こう記している。

「（ただし）価格だけは，チェサピーク地域（タバコ生産の中心地）におこったことを説明するには不十分である。17世紀を通じて，タバコ価格は長期的には低落傾向を示したが，これは生産増大の結果であって，低価格は生産増加を妨げなかった。豊作はチェサピークでの価格を通常下落させたが，ある年に価格が低かったからといって翌年生産が減少したという証拠はない。1711年から1725

注(17) Zevin [74], Davis et al. [11].

年の期間は，比較的価格は高かったが，生産は停滞していた。1726年から1774年までは，何年かの特別な年を除いて，チェサピーク・タバコの価格は一般的に低かった。ただし下落しつづけたわけではない。チェサピーク地域からの輸出量は，この低くはあるが安定した価格の時期に3倍に伸びた。」そして彼は，この最後の時期について，フランス政府の独占的購入による需要増大，という国際市場の変化を指適する。

ところで，上記の如き文章は経済学者の目から見ると，いささか不満足である。歴史家は国際的なタバコ市場の重要性を説くが，価格変動の意義はあまり認めない。彼によれば価格変化は生産量に影響しない，すなわち価格に対する供給の弾力性はゼロということになる。図に示せば，図2の如くであって，価格（P）が変化しても生産量は（Q）変化しない。

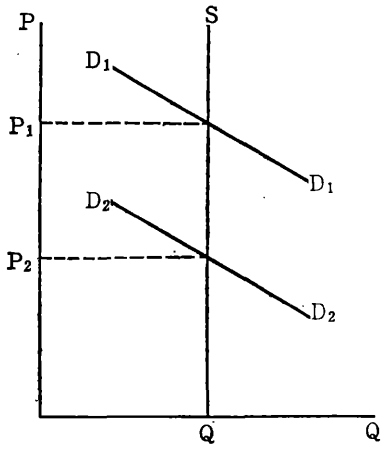

図 2

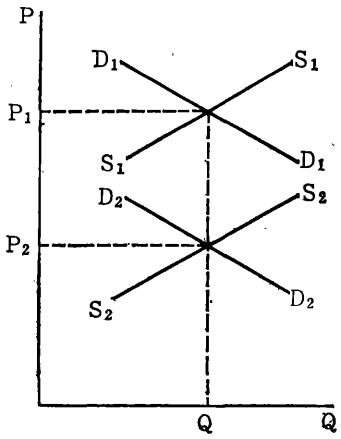

図 3

しかし，同様な結果は図3の如き場合にももたらされる。すなわち，価格に対する供給の弾力性はゼロではなく，価格が上昇すれば供給は増加し，低落すれば減少する。にもかかわらず，価格が P_1 から P_2 へ下落しても，あるいは P_2 から P_1 へ上昇しても，供給量 Q は変化しない。何故ならば供給曲線が S_1 から S_2 へ，あるいは S_2 から S_1 へ移動したからである。17世紀の価格下落が生産減少をもたらさなかったのは，供給曲線が右へ移動（$S_1 \rightarrow S_2$）したためであろう。1711年から1725年にかけて，価格が上昇したにもかかわらず供給が増大しなかったのは，地味の枯渇や労働力不足によって，供給曲線が左側へ後退（$S_2 \rightarrow S_1$）した結果とも考えられる。類似の事情は1726年から1774年までの期間についても考えられる。フランスの独占的購入による需要増大が，チェサピーク地域からの輸出量増加に結びつくという議論を，そう簡単に受け入れることはできない。需要増大は通常であれば価格上昇をもたらす。それが価格上昇ではなく供給増加をもたらすためには，(1)供給の弾力性が無限大であり，一定価格で無制限に供給が増加する。(2)供給曲線が右側へ移動す

る，という二つの可能性が考えられる。当初の歴史家の想定からすれば，供給の弾力性はゼロ，もしくはゼロに近いのであるから，(1)のケースはほとんど考えられない。すなわち，図4において，

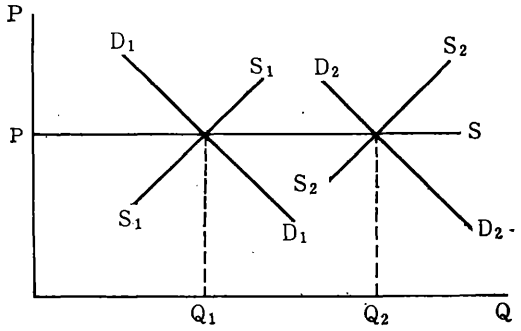

図 4

供給曲線が横軸に平行であるなような事態はあり得ない。むしろ，$D_1 \to D_2$ という需要曲線の移動と同時に $S_1 \to S_2$ と供給曲線も移動したため，価格Pは変化せず，供給量は Q_1 から Q_2 に増大したという(2)のケースであったと考えられる。ところで，かかる事態は，西部の豊かな土地への移動，あるいは黒人奴隷の輸入によって，生産性の上昇もしくは生産コストの低下が生じたとする伝統的な説に合致する。

かくして，上記の歴史家の文章は，価格変化が生産に影響しないという論点を証明していないのみならず，彼が否定している伝統的な説明の正しさをも暗示している。plain common sense では college econmics にも太刀打ちできないというべきであろうか。(18)

最後の例として，帝国主義の問題をとりあげよう。帝国主義がケシカランという点では，奴隷制の場合と同様，あまり異論はないのであるが，道徳的判断とは別の経済的分析となると，十分にはなされていなかったともいえる。レーニンに従えば，帝国主義の基本的要素は資本輸出である。アメリカにおいて，総投資額中，海外投資のしめる割合は，1869年から1897年の時期には1パーセント，1900年から1929年の時期には6パーセントにすぎなかった。別の見方をするならば，アメリカ帝国主義の最盛期たる1900—1929年の時期において，海外投資された額は，カリフィルニア州内において投資された額にも及ばなかった。かかる計量的研究は，アメリカにとって資本輸出があまり重要でなかったことを示しているが，もちろんそれで帝国主義の罪が軽くなるわけではない。アメリカにとっては大きな額でなくとも，受入国にとっては巨額ということもあろう。また，帝国主義の最大の害悪は，それが侵入した諸国の人民を無慈悲に搾取した点にある。それ故，新しい経済史

注(18) Price [58] Olson [56].

家は，アメリカ帝国主義が，中南米諸国にいかなる経済的影響を与えたかを研究した。

とりあえず考察の対象となるのは労働者の賃金，地主に支払われる地代，企業者の受けとる報酬ということになる。まず賃金について見よう。一般的にいえば，現地労働者の賃金は上昇した。例えばキューバにおいて，砂糖生産の拡大は雇用の増加をもたらしたが，他国からの労働者輸入は禁じられていたので，キューバ労働者の賃金は理論的に上昇せざるを得ず，実際にも上昇した。もっとも賃金が現金で支払われたとはかぎらない。例えばユナイテッド・フルーツは金券で支払い，労働者はカンパニー・ストアで物資を購入した。これは二重の搾取ではなかったか。実際には，現地労働者の実質賃金も上昇した。カンパニー・ストアの侵入は，それまで存在していた現地商人のローカルな独占に終止符を打ち，労働者はむしろ，これまでよりも安く品物を入手することができた。

次に地代はどうか。アメリカの会社による投資は，当然のことながら地価を上昇せしめた。アメリカの会社は「ごく安い価格で土地を手に入れた」が，これはアメリカ側からの判断であって，彼等は現地の投資家あるいは投機業者よりも安く土地を入手できたわけではない。アメリカの会社は，しばしば現地の仲介業者を通じて土地を購入したのであり，したがって市場価格以下では購入できなかった。結局，現地の土地所有者の所得は上昇した。アメリカ帝国主義の侵入によって損害を受けたのは，現地の企業家であった。すでに記した如く，カンパニー・ストアは地方商人の独占を破壊した。アメリカ資本によって鉄道が建設された場合も同様である。それは従来から存在した運送業者の職を奪い，手工業者を他地域もしくは外国商品との競争にさらした。しかし，ローカルな独占の打破は，労働者や農民に利益を与えたし，又，新たな企業者が進出する機会をも与えた。一面，アメリカ資本による鉱山やプランテーションの開発は，現地の資本家から，将来の投資の機会を奪ったともいえる。但し，当時の状況では，現地の資本家が長期的投資をする可能性は少なかった。中南米諸国には金融機関が発達しておらず，利子率は著しく高かったからである。さらに，新しい経済史家は，帝国主義的進出が，アメリカにとって，いかなる経済的利益を与えたかを研究し，それがほとんど利益をもたらさなかったことを明らかにした。以上，これらの研究は，アメリカ帝国主義の弁護のためになされたわけではない。これらはヴェトナム戦争以降になされた研究であって，むしろ，海外進出の空しさ，愚かしさを示そうとしたものといってよい。(19)

Ⅲ　新しい経済史と経済学

さて，上記の諸研究は新しい経済史のごく限られたサンプルであって，これだけで全体像を語ることはできない。フォーゲルの名を高めた counter-factual なモデルの使用法であるとか，19世紀後半のアメリカ経済を対象とする一般均衡モデルなども紹介すべきであろうし，アメリカ以外の

注(19)　Lebergott [42], Zevin [75].

国を扱った研究も紹介すべきかもしれない。しかし，本稿の目的は新しい経済史の achivements の紹介ではないので，例示は以上にとどめておきたい。なぜ新しい経済史が，旧来の経済史家にショックを与え，他方，経済学者にはあまり感銘を与えないか，という理由は例示の範囲でも明らかと思われるからである。(20)

旧来の経済史といえども，単に経済的事件のクロノロジーに終っていなかったことはいうまでもない。たとえ plain common sense であろうと，奴隷制や産業革命や帝国主義に関して，分析し判断を下していた。さらに統計や数字も利用していなかったわけではない。植民地時代のタバコ価格にせよ，産業革命期の綿工業の生産高にせよ，伝統的な経済史が扱ってきたことであった。したがって，新しい経済史が量的証拠を重視することに対して，シュレジンジャー2世の如く「大切な問題というのは，数字では答えが出せないからこそ大切なのだ」といい切ることはできなかった。そうであるからこそ，新しい経済史の研究者によって，従来の判断は bad economics によるものだ，旧来の数字は misused numbers だ，と攻撃されると，まごつかざるを得なかったのである。(21)

もちろん，それまでの経済史家が何ら反撃を試みなかったわけではない。しかし，シュレジンジャー2世のような超越的批判でなく，内在的あるいは実質的批判をおこなおうとすると，困難があった。奴隷制の利益を論ずるにあたり，プランターの会計記録を信用して良いか否か，ニュー・イングランドの工業生産に関し，役人の報告書は正確か否か，というような点については，旧来の経済史家は十分な知識と経験を有していた。しかし，議論が展開して，奴隷制部門の生産関数がコブ・ダグラス型で良いか否か，需要関数が線型で良いか，という風になると沈黙しがちになった。それらを利用して計量的研究をおこなった経験のある者は，ほとんど存在しなかったし，完全競争や ceteris paribus などという仮定の下で議論を進めた経験も，あまりなかったからである。新しい研究者が判断の基準とした数字は，史料からの生まの数字ではなく，理論に基づいて加工され，あるいは導き出された数字であった。しかし，そのような理論にあまり注意を払ってこなかった従来の研究者は，肝心の点について有効な反撃を加えることができなかった。

新しい経済史が衝激的であった理由は，単に見慣れぬ方程式を利用していたからではない。それが従来の通説を，しばしば根こそぎにしてしまったことも，驚異であった。従来，経済史における通説への反対や，通説の変更は，いわば部分的にゆっくりおこなわれるべきものであった。新しい方法や史料の発見も，すべてをひっくりかえすようなことはなかった。フロンティアの意義についての修正・反論も，合衆国憲法の経済的解釈をめぐる論争も，当時としては激しいものであったにせよ，一挙に通説をくつがえすものではなかった。新しい経済史の場合にはそうではない。従来の方法が，建物の一部改装や補修あるいは建て増し程度であったとすると，新しい経済史の場合には，

注(20) McClosky [46], McClelland [44] などを見よ。
(21) Schlesinger [66].

完全な建て替えであった。フォーゲル流にいうならば，建築資材そのものからして違っていたからである。ノースが1966年に出版したテキスト巻末の参考文献には，二三の例外を除き，10年以上前に出された書物や論文はのっていない。「古い経済史の大部分はドアの外へ掃き出す必要がある」という彼の確信にもとづいてのことであったろう。(22)

ところで，経済理論や計量的方法の歴史への適用は，旧来の経済史家にとっては反省をせまるものであり，新しい物の見方を教えてくれるものであったが，経済学者にとってはそうではなかった。せいぜい，経済学の用具，それもごく初歩的な理論が，過去の分析にも利用できる事実を知らせてもらったにすぎなかった。もちろん，従来の経済史の「敍述偏重，類語反復，理論欠除」（ドーマー）には不満な経済学者が多かったから，新しい経済史の方向に好意を抱いた者は存在した。しかし，歴史上の出来事に対して経済理論を応用することに関しては，懐疑的な者も多かった。さらに，新しい経済史の，経済学への貢献という点では，必ずしも満足すべき状態ではなかった。それは理論から歴史への一方交通であり，逆の流れはほとんどなかった。過去の分析に経済理論が役立つことを示しただけでは，理論用具改善への刺激は出てこなかったといってもよかろう。フォーゲルが，経済理論と経済史の再統合を主張した1964年のアメリカ経済学会大会では，偶々，非市場的意志決定に関して，ダウンズやタロックも論文を発表していた。経済理論の外部への応用という点では，一寸似かよったところもあるが，経済学者に対する刺激という点では，新しい経済史は後者に及ばなかった。(23)

新しい経済史は，歴史の分析に経済理論を利用することの有効性を主張し，その効果を示すことには成功した。しかし，経済学にとって，過去の現象を分析することが何故必要なのかを，十分説得的に主張したとはいえない。例えばデイヴィスは，過去は社会科学にとっての実験室であり，経済史の研究は経済理論をテストするために有益であるという。しかし，何故，現在ではなく過去を研究するのか。価格理論の有効性をテストするのに20世紀ではなく，19世紀を研究すべきなのか，という点については，新味のある答を出していない。せいぜい，現在の問題を理解するためには，その背景すなわち歴史を知らねばならない，と述べるにとどまっている。歴史の効用，もしくは教育的有用性について，いわば言い古された御託を並べるだけともいえる。経済史の側からの，より積極的な貢献が求められるのは当然であった。(24)

かかる事態に対する反省から生じたのが，制度（Institution）の変化についての理論であった。新古典派の経済理論，「とくに価格理論を身につけていること」が，新しい経済史研究者の条件であったが，価格理論だけでは説明できない事柄も多かった。新しい経済史の多くが対象とした19世紀のアメリカは，たしかに完全市場のモデルに近かったかもしれない。また，奴隷制とかニュー・

注(22) North〔51〕. 引用した文章は〔52a〕p. 91.
(23) Domar〔13〕, Downs〔14〕, Tullock〔69〕.
(24) Davis et al.〔10〕. なお McClosky〔45〕も見よ。

イングランド綿業とかいう限定された事象が考察の対象であれば，価格理論の切れ味も良かったに違いない。しかし，ヨーロッパの拡大とアメリカの発見であるとか，大西洋経済の勃興とアメリカ経済の発展というような大きなテーマになると，価格理論を身につけていても立ち向いかねた。しかも，colleagues in economics が経済史研究者に期待するのは，こうした問題についての意見であった。

外部からの当然の要求と，他方では内在的批判から，デイヴィス，ノース，トーマス等は経済の長期的変化，あるいは社会全体の変化を説明できるような理論を生み出そうと苦心した。「制度史的アプローチ」というのが，かかる傾向を指す。これについては別の機会に詳しく述べたので，ここでは極く簡単にふれるにとどめたい。彼等は，社会や経済の制度的編成を与件とし，その枠の中で経済活動を考察することをやめ，制度的編成それ自体の変化を扱おうとした。これは新しい経済史としては大きな冒険であり，方向転換であった。しかし，この試みは成功したとはいい難い。その原因はノース達が経済学者のカラを脱け出ることができなかったことにある。制度の変化は人間によってもたらされるが，ノース等の理論にあっては，人間は利潤最大化の原則の下に行動するものとされる。(25)

もちろん，利潤という言葉は，普通よりは広く解釈されるが，結局，彼等の理論は経済理論をいく分言いかえたものにすぎなかった。制度の変化において，人間は，生産や投資の理論における企業と類似の行動をとるのである。しかも，最大化仮説は時代や国境を越えて適用される。素朴な唯物史観が，すべてを経済的利害に結びつけ，あらゆる事柄を説明してしまうのと同様，利潤最大化の仮説はすべてにあてはまる。政治家は自分への投票数の最大化を，宗教家は信者数の最大化を，国王は革命発生可能性の最小化を求めて行動するといった具合である。すべてを説明するということは，実は何ひとつ説明しないに等しく，無内容といわざるを得ない。制度史的アプローチによって，経済学者の間での新しい経済史の評価が高まったとは思えないし，歴史家の反応も好意的ではない。むしろアメリカの歴史家の間では，人間をもっと複雑な存在としてとらえようとしたフランス・アナール派の業績の方が，共感をよんでいる。ある意味では，新しい経済史グループの初期のメンバーの一人であったヒューズが高く評価する例のポラニーにならって，非経済の論理と経済の論理との交替・対立を探るべきであったかもしれない。ジョーン・ロビンスンなどは，（これがアメリカで権威付けになるかどうかは疑問だが）その方向に同感を示している。(26)

結局，経済学に身を寄せすぎたことが，新しい経済史のつまずきの原因でもあった。歴史の効用は視野を広めることであろう。過去に経済理論を応用すれば，その当人の視野は広まるかもしれな

注(25) 岡田〔78〕を見よ。

(26) アメリカにおけるアナール派の紹介は Forster〔22〕。Polany〔59〕は最近わが国でも流行しているし，Robinson〔62〕の読者は多いであろう。

いが，経済学全体としての視野は必ずしも広くならない。とはいえ，研究者個人の視野を，あまりに拡張しようとすれば，ノースとトーマスの『西欧世界の勃興』の如き大失敗をおかすことになる。逆に，視野を狭めたまま厳密な分析をおこなえば，フォーゲルとエンガマンの『苦難のとき』のような惨たる結果を招くことになる。(27)

ここで，イギリスの経済史家ハバカクの言葉を，別の機会にも引用したことがあるが，ぜひ紹介しておきたい。彼はほぼ次のように記している。「新しい経済史家は，まず仮説を設定し，その検定に必要な史実を考察するという方法をとる。旧来の歴史家は，これとはまったく異なる方法をとった。すなわち，関心を抱いている時代や問題に関連のありそうな史実をたくさん集め，時間をかけて知識を集積していくうちに，次第に考えがまとまってくるというやり方である。この方法には，たしかに，ゆきあたりばったり的なところがある。しかし，たくさんの歴史の本を読み，人間がさまざまの状況の下でいかに行動するかを学び，特定の制度や事件について詳しく知ったうえで下す判断のほうが，新しい経済史家による厳密な分析よりも，正しい場合があるかもしれない。厳密な分析は，特定の個所に強力な光線を浴びせるであろうが，まわりの景色をゆがめたり，暗闇の中に残す可能性がある。旧来の方法は，それほど強力ではないが，よりおだやかで信頼できる明りを，人間活動の全領域になげかけるであろう。(28)」

Ⅳ　経済史と歴史学

新しい経済史家の方法は，いわばビジネスマンの旅行に似ている。Aという地点に一番早く到着する方法で出かけ，商用をすませたらさっさと帰ってくる，というわけである。旧来の歴史家の方法は，閑人の旅である。信州にあこがれ，のんびりした旅に出る。泊る宿屋も，日数もはっきりは決めていない。気に入った温泉場があったら長逗留し，古道具屋をひやかして，思わぬ掘出物に喜ぶ，といった趣きであろうか。たしかに新しい方法の方が効率は良い。しかし研究の奥行きという点で，何かしら物足らず，またふくらみに欠けることがあるのではないだろうか。ここでもう一つ具体例をあげ，新旧の方法を比較してみよう。

アメリカ植民地において，主たる労働力は当初，白人の年期契約奉公人であった。しかし，南部では次第に黒人奴隷が使用されるようになり，18世紀になると後者が主たる労働力になるに至った。かかる変化の原因については，年期奉公人は7年間で自由の身になってしまうので安定性に欠けるとか，逃亡した際に黒人の方がつかまえやすいとか，諸説があった。最近の新しい経済史家に

注(27)　North and Thomas〔53〕, Fogel and Engerman〔20〕. いずれも邦訳があり，後者には訳者の詳しい解説がついている。

(28)　Habakkuk〔28〕p. 318.

よる研究は，白人奉公人から黒人奴隷への転換が経済的理由によるものであること，すなわちコストを比較すると後者の方が有利であったことを明らかにした。これは，それなりに優れた業績ではあるが，以上によって「証明終り」とされてしまうと，少々味気ないというのが正直な感想である。(29)

これに対して，植民地時代を長年研究してきた歴史家の解釈は，いく分厳密さには欠けるが，ひろがりを持っている。歴史家は，白人奉公人に黒人奴隷がとってかわるという現象にも注目するが，同時に，奴隷制の普及と植民地住民の自由・独立への要求のたかまりとが平行して生ずる点に注目する。イギリス本国に対して自由と平等を主張したジェファスンやワシントンは，奴隷所有者でもあった。このパラドックスをいかに解くか。歴史家の考えはこうである。南部植民地のプランターは，労働力を得るため白人奉公人を導入した。当初は土地も豊富だったので，7年の年期を勤めれば奉公人は自由と土地を得ることができた。しかし，17世紀も中頃になると，大農園が拡大をつづけ，自由を得た白人は，よほど奥地に進まぬかぎり自分の土地を持てなくなった。かくして白人無産者層が増大するに至り，プランター層にある種の脅威を与えるようになった。彼等は若く，多くは独身で，インディアンから身を守るため銃も持っていたからである。プランター層の不安は，1676年のベイコンの反乱で現実のものとなった。労働力は必要だが，年期の明けた白人奉公人は危険な存在となったのである。かくして黒人奴隷に目がつけられた。黒人奴隷は経済的にも有利であったかもしれないが，社会的により有益であった。彼等は最初から奴隷であって解放する必要はなく，多くは家族を持ち，当然武器は所有しなかったし，団結も許されていなかった。18世紀に入ると黒人奴隷が一般化し，白人奉公人は減少した。フロンティアの開拓も進み，白人無産者層の割合は次第に減少した。一方，多数の黒人奴隷の存在は，白人間の心理的団結を強めた。こうしてプランター達は，安心して自由と平等を語り得るようになった。奴隷は，もともと自由とは無縁の存在だったからである。以上，白人奉公人から黒人奴隷への移行は，単なるコストの問題以上のものであったし，奴隷制の普及こそ植民地住民の自由への要求を可能ならしめたのであった。(30)

旧来の歴史家，あるいは歴史学に近い立場をとる経済史家には，専門とする時代，あるいは地域というものがあった。フィリップスといえば奴隷制南部，ゲイツといえば公有地政策，ハンセンといえば移民，チャンドラーといえば大企業といった具合である。したがって，お弟子にしても，南部に興味を持つ者はウッドワードの下に，フロンティアにひかれる者はビリントンの所へ，建国期を研究したい者はジェンセンにつく，という具合で研究史の蓄積が出来上っていった。(31) 新しい経済史家は，これと異なる。ノースはアメリカの工業化と，ヨーロッパの封建制と，石器時代の人類と

注(29) Galenson [24], Gray and Wood [26].
(30) Morgan [49].
(31) ここでは代表作のみあげておこう。Phillips [57], Gates [25], Hansen [29], Chandler [5], Woodward [73], Billington [3], Jensen [33].

を扱う。フォーゲルは鉄道についても，奴隷制についても，公有地政策についても研究する。ウィリアムスンは，明治期の日本に一般均衡モデルを適用してみたところ，上手くいったので，19世紀後半のアメリカにもそれを使ってみた。[32] ざっと，こんな具合であって，まことに彼等は万能選手である。しかし，そうした態度であるから，白人奉公人から黒人奴隷へ，の問題にしても「証明終り」となってしまえば，それでおしまいである。歴史家のように，より広い文脈の中で対象をとらえ，想像力を羽ばたかせる余裕はない。

たしかに，『ドン・ジョヴァンニ』の「カタログの歌」の如く，あの問題もこの問題も征服してしまうのは快いことかもしれない。しかし，それには危険も伴うのであって，ごく初歩的な危険として，知識の不足ということがある。ノースが，公有地政策と経済発展との関連について，「preliminary spadework がなされていない」と書いたことに関し，シャイバーが「なされていないのは spadework だろうか，それとも誰かさんの homework だろうか」と皮肉っているが，新しい経済史家の仕事には，かかる感想を抱かされることも多い。[33] この点は，新しい経済史家を目指す研究者の多くが，経済学部出身者であり，しかも経済学の勉強に大部分の精力を傾けた人びとであることにもよる。かつての経済史は，歴史学部と経済学部の双方で教えられていたし，歴史学部で学んで経済史家たることも可能であった。しかし，1960年代の半ば以降，経済史は経済学部という傾向が強くなる。ハーヴァードの歴史学部で教えるランデス（彼は，ケンブリッジ経済史の，産業革命の章の執筆者である）は，60年代半ばから70年代末にかけて彼が送り出した研究者40名の内，経済史専攻は1名にすぎなかったという。[34] もちろん教育がすべてではない。しかし，歴史の諸分野についての知識の不足は，過去の業績に関する無知のみならず，史料の扱い方に関する不注意をも招きやすい。新しい経済史が，イギリスにおいてはあまり成功をおさめなかった原因は，こうした点にも求められそうである。歴史よりも経済学について良く知っている経済史家というのは，一寸したカリカチュアかもしれないが，全くの空想の産物ではない。「経済史と歴史の再統合」の必要性が論じられるようになったのも，かかる背景の下であった。[35]

先のハバカクの言葉は，歴史上の出来事の分析に，一寸経済理論を使ってみたり，都合の良さそうな題材をとりあげて理論を応用してみる傾向への警告であった。理論のくちばしで，あれこれと歴史をつまみ食いしてみる何でも屋には，視点も定まらず，歴史観も生れてこない。関連のない種々の問題について，個別的には優れた分析をしても，全体的な歴史像はなかなか浮び上ってこないであろう。かつて，イギリス重商主義政策がアメリカ植民地に与えた影響について，新しい経済史家の間で賑かな論争があった。これは当然，独立戦争の原因をめぐっての議論であったが，結局の

注(32) North〔50〕〔53〕〔54〕, Fogel〔16〕〔20〕〔21〕, Williamson〔71〕.
(33) Scheiber〔65〕p. 591.
(34) Landes〔39〕〔40〕.
(35) Jones〔34〕, Wilson〔72〕.

ところ，いろいろな計算が空転しただけで，原因についての理解は深まらなかった。そして，流行が終ると，この問題から人びとは去って行ってしまった。さすがにノースも，この論争をfruitlessと評しているが，個々の研究者にとっても，あまり収穫はなかったに違いない。[36]

V 歴史と理論

誤解のないようにしておきたいが，歴史研究に理論が不要というわけではない。ブロックも言っているように，「初めに史料あり」という表現は正しくない。史料は，研究者が質問しないかぎり，語りかけてくれないからである。「初めに l'esprit あり」なのだ。[37] たとえば，アメリカ独立宣言を前にして，ジェファスンの思想や哲学に興味を持つ研究者は，「人類の歴史において……」という最初の部分に注目するだろう。しかし，大陸会議に集った代表たち，又は彼等のおかれた政治的状況を重視する研究者は，最後の署名の部分に注目する。なぜ，ジョン・ハンコックの署名は中央に大きく書かれているのか。なぜ，ニュー・ハンプシャーのマシュー・ソーントンは同じ邦からの二人の代表とは離れたすみっこに署名しているのか，といった具合である。[38]

もっとも，歴史における理論を，あまり大げさなものと考えてはならない。それは，せいぜい，史料に問いかけ，史実を整理するための仮説にすぎないのであって，それ以上のものではない。歴史家にとっての理論とは，堅固な城壁や堀にかこまれ，その中に閉じこもって敵と戦うための城ではない。リン・ホワイトの巧みな比喩を借りるならば，それは旅人が昼の弁当を開くために憩う木蔭である。[39] たしかに偉大な理論も存在しないわけではない。ピレンヌ・テーゼとか，ウェーバー理論は，これにあたるだろう。しかし，かかる大理論は，ピレンヌやウェーバーの歴史観，あるいは世界観そのものであり，そこで問われているのはヨーロッパとは何か，近代とは何かというスケールの問題である。通常の歴史研究は，ずっとスケールの小さいものであって，「ジェファスンはロックの影響を受けていたか」とか，「独立宣言は7月4日に署名されたのか」という問いに答えるにすぎない。歴史における偉大な理論は，1世紀に二つか三つしか出ない筈のものであり，それで十分なのである。

さらに，いかに偉大な理論であっても，歴史の理論の求めるものは個性の認識であって，すべてに通ずる一般法則ではない。ヨーロッパという歴史的個性，近代という歴史的個性の認識こそ，ピレンヌやウェーバーのめざしたものであった。したがって，トインビーの理論のようになってしまえば，それは文明論もしくは哲学であって，もはや歴史の理論とはいえないであろう。経済史を経

注(36) North〔51〕2nd. ed. p. 55.
(37) Bloch〔4〕pp. 62–63.
(38) この点について興味を持つ者は斉藤〔80〕を見よ。
(39) White〔70〕p. 3.

済学の一部分と考える人びとにとっては，理論や法則は時代や国境を越えたものでなければならない。ロストウは，「伝統的社会」という言葉によって，「中国の諸王朝，中東および地中海の文明，中世ヨーロッパ世界等，ニュートン以前の世界をすべて一括」した。[40] ロストウの理論は，経済学者にとっても好評であったとはいえないが，歴史家にとっては，まさに異質な理論であった。

ところで，個性の認識などということが，どんな意義を持つのかと疑問を抱く経済学者がいるかもしれない。こうした疑問に対しては，一般の人びとの健全な反応を示すにとどめておきたい。たとえば中東に転勤を命ぜられた商社マンは，どんな行動をとるだろうか。彼はすべての世界にあてはまる経済理論をブラッシュ・アップするため，大学でならったサミュエルスンを読みなおすであろうか。それとも，アラブの歴史や，イスラム教についての書物を読むであろうか。

最後に，歴史家の側における経済学もしくは経済理論に対する誤解についても記しておきたい。新しい経済史家は plain common sense に代えるに，精緻な経済理論をもってした。彼等は旧来の物語り的経済史を非科学的であるとし，経済理論の適用が，経済史を科学的なものとすると主張した。ノースは，新古典派の経済理論だけでは不十分であるとの認識から，制度史的アプローチを導入したが，理論への信仰は捨てていない。「新古典派の理論を捨てることは，科学としての経済学を捨てることだ」[41] と彼はいう。かかる不動の自信の前にあっては，歴史家は humbleたらざるを得ない。しかも，『苦難のとき』を書いた後のフォーゲルは，計量的方法の採用は歴史を科学的ならしめるのではないと言い，さらに，歴史は主に humanistic discipline であると言う。[42] 新しい経済史のつまずきについては承知していたとしても，「非科学的」たることを好まぬ経済史研究者は，やはり経済学の一部門にとどまることを希望するかもしれない。しかし，ヒックスは次のように言っている。[43]

> Economics is a leading example of uncertain knowledge. ... If it is on the edge of the sciences, [economics] is also on the edge of history.

二流の数学者の論文が専門の経済学者を混乱させることがあるように，二流の経済学者によって専門の歴史家が惑わされることもあった。けれども，一部の経済史研究者が思うほどには，経済学は正確でも厳密でもないであろう。隣りの芝生は緑に見えるのである。歴史畑の中の経済史家も，もっと庭木や草花の手入れに丹精しなければならない。ふたたび季節はめぐってこようとしているのだから。

注(40) Rostow [63].
(41) North [52b] p. 974.
(42) Fogel [18]
(43) Hicks [32] p. 2, p. 4.

〔参 考 文 献〕

欧文文献

Abbreviations:

AER American Economic Review
AHR American Historical Review
ASR American Sociological Review
EEH 2nd Ser. Explorations in Entrepreneurial History
EEH Explorations in Economic History
EHR Economic History Review
EJ Economic Journal
JAH Journal of American History
JEH Journal of Economic History
JEL Journal of Economic Literature
JPE Journal of Political Economy
QJE Quarterly Journal of Economics

番号に＊印のあるものは邦訳あり。

〔1〕 Andreano, Ralph. "Alfred Marshall and American Economic Development," in *New Views on American Economic Development*, ed. Andreano. Cambridge, Mass., 1965.

〔2〕 Ashley, W. J. "On the Study of Economic History," *QJE*, 7 (Jan. 1893), 115-136.

〔3〕 Billington, Ray Allen. *Westward Expansion: A History of the American Frontier*, 4th ed. New York, 1974.

〔4〕* Bloch, Marc. *Apologie pour l'Histoire ou Metier d'Historien*. 7e ed. Paris, 1974.

〔5〕* Chandler, Alfred D., Jr. *The Visible Hand: The Rise of Modern Business Enterprise in the United States*. Cambridge, Mass., 1977.

〔6〕 Conrad, Alfred H. and John R. Meyer. "The Economics of Slavery in the Ante-Bellum South," *JPE*, 66 (April 1958), 95-130.

〔7〕 Cunningham, W. "The Perversion on Economic History," *EJ*, 2 (Sept. 1892), 491-506.

〔8〕 David, Henry, Harold U. Faulkner, Louis M. Hacker, Curtis P. Nettles, and Fred A. Shannon, eds. *The Economic History of the United States*. 10 vols. New York.

〔9〕 Davis, Lance E. "And It Will Never Be Literature," *EEH*, 2nd Ser. 6 (Fall 1968), 75-92.

〔10〕 _____, Jonathan R. T. Hughes, and Duncun M. McDougall. *American Economic History*. 3rd ed. Homewood, Ill., 1969.

〔11〕 _____, Richard A. Easterlin, and William N. Parker. *American Economic Growth: An Economist's History of the United States*. New York, 1972.

〔12〕 Dissertations in American Economic History, Arno Press Collection. New York, 1975.

〔13〕 Domar, Evsey D. "Discussion," *AER*, 55 (May 1965), 116-7.

〔14〕 Downs, Anthony. "A Theory of Bureaucracy" *AER*, 55 (May 1965), 439-446.

〔15〕* Faulkner, Harold U. *American Economic History*. 8th ed. New York, 1960.

〔16〕 Fogel, Robert W. *Railroads and American Economic Growth: Essays in Econometric History*. Baltimore, 1964.

〔17〕 _____. "The Reunification of Economic History with Economic Theory," *AER*, 55 (May 1965), 92-98.

〔18〕 _____. "The Limits of Quantitative Methods in History," *AHR*, 80 (April 1975), 329-350.

〔19〕 _____ and Stanley L. Engrman, eds. *The Reinterpretations of American Economic History*. New York, 1971.

〔20〕* _____and Engerman. *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery*, 2 vols. New York, 1974.

〔21〕 _____and Jack Rutner. "The Efficiency Effects of Federal Land Policy, 1850-1900," in *Dimensions of Quantitative Research in History*, ed. William Aydelotte. Princeton, 1972.

〔22〕 Forster, Robert. "Achievements of the Annales School," *JEH*, 38 (March 1978), 58-76.

〔23〕 Friedman, Milton, and Anna J. Schwartz. *A Monetary History of the United States, 1867-1960*. Princeton, 1963.

〔24〕 Galenson, David W. "White Servitude and the Growth of Black Slavery in Colonial America," *JEH*, 41 (March 1981), 39-47.

〔25〕 Gates, Paul W. *History of Public Land Law Development*. Washington, 1968.

〔26〕 Gray, Ralph, and Betty Wood. "The Transition from Indentured Servant to Involuntary Servitude in Colonial Georgia," *EEH*, 13 (October 1976), 353-370.

〔27〕 Gunderson, Gerald. "Slavery," in *Encyclopedia of American Economic History*, ed. Glenn Porter, vol. 2. New York, 1980.

〔23〕 Habakkuk, John. "Economic History and Economic Theory," *Daedalus*, 100 (Spring 1971), 305-322.

〔29〕 Hansen, Marcus L. *The Atlantic Migration, 1607-1860*. Cambridge, Mass., 1940.

〔30〕 Heaton, Herbert. *Economic History of Europe*. New York, 1948.

〔31〕* Hicks, John. *A Theory of Economic History*. Oxford, 1969.

〔32〕 _____. *Causality in Economics*. Oxford, 1979.

〔33〕 Jensen, Merrill M. *The New Nation: A History of the United States During the Confederation, 1781-1789*. New York, 1950.

〔34〕 Jones, E. L. "Institutional Determinism and the Rise of the Western World" *Economic Inquiry*, 12 (March 1974), 114-124.

〔38〕* Keynes, John M. *The Economic Consequence of the Peace*. Collected Writings, vol. 2. London, 1971.

〔36〕 Keynes, John N. *The Scope and Method of Political Economy*. London, 1891.

〔37〕 Kindleberger, Charles P. *Economic Response: Comparative Studies in Trade, Finance, and Growth*. Cambridge, Mass., 1978.

〔38〕* Kuznets, Simon. *Economic Growth of Nations: Total Output and Production Structutre*. Cambridge, Mass., 1971.

〔39〕 Landes, David S. "Technological Change and Development in Western Europe," in *Cambridge Economic History of Europe*, vol. 6, eds. H. J. Habakkuk and M. Postan. Cambridge. 1965.

〔40〕 _____. "On Avoiding Babel," *JEH*, 38 (March 1978), 3-12.

〔41〕 _____and Charles Tilley. *History as Social Science*. Englewood Cliffs, N. J., 1971.

〔42〕 Lebergott, Stanley. "The Returns to U. S. Imperialism, 1890-1929," *JEH*, 40 (June 1980), 229-252.

〔43〕 Lewis, W. Arthur. *Growth and Fluctuations, 1870-1913*. London, 1978.

〔44〕* McClelland, Peter D. *Causal Explanation and Model Building in History, Economics, and the New Economic History*. Ithaca, N.Y., 1975.

〔45〕 McCloskey, Donald N. "Does the Past Have Useful Economics?" *JEL*, 14 (June 1976), 434-461.

〔46〕 _____"The Achievements of the Cliometric School," *JEH*, 38 (March 1978), 13-28.

〔47〕 Marshall, Alfred. *Industry and Trade*. London, 1919.

〔48〕 _____. "A Reply to Dr. Cunningham," *EJ*, 2 (Sept. 1892), 506-519.

〔49〕 Morgan, Edmund S. "Slavery and Freedom: The American Paradox," *JAH*, 59 (June 1972), 5-29.

〔50〕 North, Douglass C. *The Economic Growth of the United States, 1790-1860*. Englewood Cliffs. N.J., 1961.

〔51〕 _____. *Growth and Welfare in the American Past: A New Economic History*. Englewood Cliffs, N.J., 1966, 2nd ed. 1974.

〔52a〕 _____. "The State of Economic History," *AER*, 55 (May 1965), 86-91.

〔52b〕 _____. "Structure and Performance: The Task of Economic History," *JEL*, 16 (Sept. 1978). 963-978.

〔53〕* _____ and Robert P. Thomas. *The Rise of the Western World*. Cambridge, 1973.

〔54〕 _____ and Thomas. "The First Economic Revolution," *EHR*, 30 (May 1977), 229-241.

〔55〕 Nurkse, Ragnar. *Patterns of Trade and Development*. Stockholm, 1959.

〔56〕 Olson, Mancur., Jr. "Discussion of Price's paper," *JEH*, 24 (December 1964), 512-16.

〔57〕 Phillips, Ulrich B. *Life and Labor in the Old South*. Boston, 1929.

〔58〕 Price, Jacob M. "The Economic Growth of the Chesapeake and the European Market, 1697-1775," *JEH*, 24 (December 1964), 496-511.

〔59〕* Polanyi, Karl. *The Great Transformation*. Boston, 1957.

〔60〕 *Purdue Faculty Papers in Economic History, 1956-1966*. Homewood, Ill. 1967.

〔61〕 Redlich, Fritz. "Potentialities and Pitfalls in Economic History," *EEH*, 2nd Ser. 6 (Fall 1968), 93-108.

〔62〕* Robinson, Joan. *Freedom and Necessity*. London, 1970.

〔63〕* Rostow, W. W. *The Stages of Economic Growth*. Cambridge, 1960.

〔64〕 Rutten, Andrew. "But It Will Never Be Science, Either," *JEH*, 40 (March 1980), 137-142.

〔65〕 Scheiber, Harry N. "The Economic Historian as Realist and as Keeper of Democratic Ideals: Paul Wallace Gates's Studies of American Land Policy," *JEH*, 40 (Sept. 1980) 585-593.

〔66〕 Schlesinger, Arthur., Jr. "The Humanist Looks at Empirical Social Research," *ASR*, 27(Dec. 1962), 768-771.

〔67〕* Schumpeter, Joseph A. *The Theory of Economic Development*. Cambridge, Mass., 1934.

〔68〕 Thernstrom, Stephan. *Poverty and Progress: Social Mobility in a 19th Century City*. Camb-

ridge, Mass., 1964.

〔69〕 Tullock, Gordon. "Entry Barriers in Politics," *AER*, 55 (May 1965), 458–466.

〔70〕* White, Lynn., Jr. *Dynamo and Virgin Reconsidered*. Cambridge, Mass., 1971.

〔71〕 Williamson, Jeffrey G. *Late Nineteenth-Century American Development: A General Equilibrium History*. Cambridge, 1974.

〔72〕 Wilson, C. H. "The Historical Study of Economic Growth and Decline in Early Modern History," in *Cambridge Economic History of Europe*, vol. 5, eds. E. E. Rich and C. H. Wilson. Cambridge, 1977.

〔73〕 Woodward, C. Vann. *Origin of the New South, 1877–1913*. Baton Rouge, 1951.

〔74〕 Zevin, Robert B. *The Growth of Manufacturing in Early Nineteenth Century New England*. New York, 1975.

〔75〕 _____. "An Interpretation of American Imperialism," *JEH*, 32 (March 1972), 333–357.

邦文文献

〔76〕 小松芳喬監修『経済史の方法』弘文堂，1969年。

〔77〕 増田四郎『西洋経済史概論』春秋社，1955年。

〔78〕 岡田泰男「制度史的アプローチ」（同文館『講座・西洋経済史』第5巻所収）1979年。

〔79〕 大塚久雄『著作集』（全10巻）岩波書店。

〔80〕 斉藤真『アメリカ史の文脈』岩波書店，1981年。

〔81〕 新保博，速水融，西川俊作『数量経済史入門』日本評論社，1975年。

〔82〕 田口芳弘「数量的・計量的経済史」（同文館『講座・西洋経済史』第5巻所収）1979年。

〔83〕 高村象平『西洋経済史』（新版）有斐閣，1971年。

〔84〕 安場保吉「新しい経済史の方法と課題」（『社会経済史学の課題と展望』有斐閣，所収）1976年。

（経済学部教授）